

対象者：F氏

テーマ：卒業論文について

インタビュアー：岡田・富永

◎ゼロ成長な「定常型社会」を目指す直島と出会って

「直島」との出会い

最初はボランティア関係に興味があって、それに関連したテーマの論文を書こうと思ったんです。でも漠然としすぎていて、自分が卒論する時に楽しいのかなって疑問に思ったんですよね。で、対象がもうちょっと身近なところだと、もっと興味湧いて楽しいかなって。そう考えた時に、自分の身近なところ、地元が高松といった点から大学2年の時に行った現代アートの島「直島」の存在を思い出したんです。友達がネットに直島のアートの写真(ex.かぼちゃ)を載せていて、最初「どこの写真かな」って思ってたんです。でも香川にいと色々情報も入ってくるようになって、直島に面白そうなアートがあるって話を聞くようになりました。行きたいと思っていたら、ちょうど仲良しの友達4人で日帰り旅行へ行くことになったんです。それが私と直島の出会いです。そこでの体験は凄く楽しかったし、街づくりや活性化に興味を持つきっかけにもなったんです。直島について調べたら、毎回行くのもアートを見られて楽しいし、これなら楽しんで自分の卒論を出来るんじゃないかと思ったのがテーマを決めた理由ですね。

卒業論文の具体的な「中身」

テーマが決定したのは3年の12月ぐらいかな。先輩たちを見て、早めに考えた方がいいのかなとは思ってました。私は商店街の近くに住んでいるので、最初は「発展、衰退する商店街の対比」もおもしろそうだと思います。そちらにも興味があったんです。直島と商店街の二つで悩んでいて、先生に相談したところ「直島おもしろんじゃない？」って言うてくれて、最終的には先生の助言を受けて決めました。

具体的な準備というか、大きなとっかかりとしては、去年の実習でお世話になったコンサルタンの人が「直島の公共交通に関するプロジェクト」に関わっていて、その人を通じて2月ごろバイト行かせてもらったことだと思います。それから3月ぐらいに具体的なテーマの提出とかがあって、読みたい文献を調べたりしました。2月3月ぐらいが始まりで…他の人に比べたら決定は早かったんじゃないかな。でも、テーマが決まってもアプローチの仕方が分からなくて悩んでました。それでも調査を進める内に方針が定まってきて、今はフィールドワークで直島の住民や役場の人を中心に聞いていて、アートが入って来たことによって今までの生活がどのように変化したのかをメインに調べてまとめるつもりです。

卒論の枚数は全部で30枚ぐらい書く予定ですね。多分全体でそれぐらい書かなきゃいけない決まりだったと思います。私は調査に行くのが遅くて、夏休みぐらいまではずっと「直島町誌」を読んでまとめて分析してて、現在のことを調べなきゃいけないのに過去のことばかり調べてたんです。チマチマと…それでちょっと時間をロスしてしまいましたね。それから9月ぐらいに矢部ゼミでやりだした広井の「定常型社会」がいい文献だったので、現在の分析視点はそれをベースに書くことにしました。持続可能な福祉社会の構想というか、「日本を初めとする先進産業国は、もはや経済成長を目標とするのではなく、定常型（ゼロ成長）社会を受け入れるべきだ」という内容は直島の在り方に近いんじゃないかと思ったんです。あとは鈴木の工業都市の階級構造を書いている論文を参考にしていますね。私は凄くラッキーで、指導教官の矢部先生がちょうど直島に興味を持っていたことからこの文献を薦めてもらいました。三菱精錬所が誘致された時の分析視点になっているので、ほんとと助かりましたよ。それから自分で社会学評論を見て、空間社会学の「空間」という視点もあるのかなって。そこで時間と空間の社会学について述べた若林の論文を見つけたんです。この「熱い都市 冷たい都市」の論文は工業都市が終わってからアートへ変化する分析視点で使っています。参考文献は主に4冊で、他はネットで直島がどのように評価されているのか見てみたり、アートの紹介について見たりしてます。かなりシンプルに進めていますよ。ただ、直島に関する先行研究がほぼないので、自分で行って実際に調べるしかないんです。でもその調べてきたデータを整理しきれてなくて、目次を作った時にも内容が混在していると先生に指摘されました。今は構成の練り直しを目標に、毎日取り組んでいます。

調査自体には今の時点で2回行ってるんですけど、工場見学も含めたらあと3回は行きたいな。それからボランティアスタッフの講習も含めたら…全体で6、7回ぐらいは行くのかな。ボランティアスタッフって空き家を使ったアートとか、作品の制作に直接携われるんですよ。直島の案内ガイドとしての役割も任されるので、直島自体やアートについての知識を身に付けるために講習会にも参加してます。中には神奈川とか関東から来る人もいるぐらいなんですよ。なかなかない機会だし、活動自体もすごく楽しいんです。だんだん直島の知名度が上がってきてるから、最近では全国でも卒論で取り上げる人が多いらしくて泊まり込みで調査している人いるみたいですね。私はもう一度1月にフィールドワークに行って、今の直島について知識を深めたいと思ってます。卒論とは別に来年ある瀬戸内国際芸術祭に関する講演にも参加するつもりなんで、直島との付き合いは長くなりそうです。

あと参考に、類似アートのある新潟の越後妻有に3泊で行ってきたんです。丁度3年に一度行われていた「大地の芸術祭」が行なわれていて、1週間かかっても回りきれない程の規模…ほんとと凄かったですね。とにかく広さに驚きました。直島とはまた違った良さがあって、また行ってみたいですね。

「卒業論文」との付き合い方

私は気分の浮き沈みが激しくて、やりたい、やりたくないの差が激しいんです。楽しい時は凄く楽しんで卒論にも取り組めるんですけどね。でも1年生のイベントの手伝いなんかをしてても常に卒論が気になってしまって、いつも頭の片隅にある感じですね。調査や日程の調整なんかは特に考えちゃいます。もう調査行かなきゃいけないよな、とか夏休みぐらいからはずっと気にかけてますよ。逃げたり焦ったりしてしまいますね。最初自分の構想としては夏にはちゃんと調査に行つてっていうのがあったんで、

その点では予定とちょっとずれてます。ただ私の場合、結果が見えてるところがまだ楽ですね。とりあえず過去から今までをしっかりまとめたいと思っています!

本当の「直島」

ベースにしている文献を読んでも、経営者層とか労働者層とか、階層関係や力関係が今に至るまでに変化していったのかと思ってました。アートの参入を果たしたベネッセが地主層と繋がり、経済成長を果たしながら発展して住民の生活が変わってしまったのかなって勝手に思ってました。けど実際インタビューに行くと三菱は今でもちゃんとした基盤であるし、人の生活とか特に経済面を支えてるっていうのが分かりました。町誌にも何かあったら三菱の精錬所から寄付金が出たという記録も残ってましたし。あとは三菱が生活を支えてベネッセがアートを発展させるっていう役割を分担しながら、2社が上手く共存して島の活性化に携わっているというのはほんと驚きでしたね。

私がインタビューをさせてもらったボランティアガイドの会長さんは現在81歳で、直島でのガイドを生き甲斐に毎日イキイキと元気に過ごしているそうなんです。アートが入ってきてから、定年して墮落していた生活が一変したんだとか。人の精神に関わっている企業ってすごいなって思いましたね。見た目だけの活性化だけじゃなくて、「見えないものに価値をおく」というように住民の意識にも変化を与えているっていうのがおもしろくなって。住民が直島に住んでいることを誇りに思っているし、インタビューに行くとみんな楽しそうにどんどん話してくれるんです。みんな直島の発展を楽しんでるって凄く伝わりましたね。

逆に「変わらないものに価値をおく」とも言われていて、一度衰退していた芝居小屋で人形劇をする「女文楽」を教育委員会の助けを借りながらも復活させる取り組みも行われているようなんです。実際は意欲的に復興させているのではなく、伝承するのでやっつものようですが。先生には否定されたんですけど、私は女文楽とアートになんらかの関係があるのかなって少し思いました。来年の芸術祭でも女文楽もイベントには組み込まれるので、ほんとの意味で形に見えるものとしての融合っていうか、「変わらないものに価値をおく」部分が見えるのかな。これからアートと一緒にやっていくんだなって思いますけど。でもほんと、直島特有の自然と融合した芸術は本当に素晴らしいと思います。私は就職自体が自分の生き甲斐ではないと思ってるんで、やっぱり町を盛り上げていくってことがやってきて楽しかったから、今後も携わって行きたいです。卒業後も直島には関わっていくつもりですよ。まあ、論文をしているうちに「定常型社会」に影響されたのかも知れないですね(笑)。直島のディレクター、北川フラムの目指す定常型社会に感心する部分が強くなるんですよ。講習会で2013年に直島をモデルとして世界に提言すると聞いて、高松凄いいって感動したし、規模の大きさにワクワクしました。直島の今後が楽しみです。